



## 私の通訳失敗談

関川富士子  
aiic<sup>(1)</sup> 会議通訳者

通訳の場で犯したさまざまな間違いを発表すると、もしかしてお客様の目にとまり、「こういう通訳者を雇うと大変なことになるのではないかと心配される」と思い、これまで、そういうことは極力避けてきました。しかし、駆け出しの頃の失敗はもうそろそろ時効ともいえるので、いくつかご披露いたします。

ただし、私の間違いの特徴は「思い込み」にあるので——つまり、単語などを正しく覚えていないことによる場合が多いので——、ほかの通訳者にとって「他人の振り見て我が振りなおせ」といった類の参考にはならないでしょう。

### 単語の思い違いの例

ドイツの兵役に関する通訳をしていたときです。頭のなかで「徴兵」と「兵役」が錯綜する私の口からでた言葉は「チョウエキ」すなわち「懲役」でした。でも、私自身は間違いに気づくどころか、実は「徴兵＋兵役＝懲役」と思い込んでいたのです。業務終了後、同僚のBさんに間違いを指摘されたのは当然のことでした。その後、同僚のZさんと一緒に仕事をする機会があり、大学入学年齢との関連でドイツのスピーカーが「ドイツ人男子には義務兵役があるので、入学年齢が高くなる傾向」と話されたとき、Zさんが「チョウエキ」と口にしたのです。聞いた私は大喜び。というのもZさんは日本語がしっかりしていることで定評のある通訳者で、そのZさんが口にするのだから、私の知らない「チョウエキ」という単語があり、それが「兵役」ないしは「徴兵」を意味しているのであろうと確信したのです。嬉しくなった私は家に帰って早速Bさんに電話しました。結果として、私は改めてお叱りを受けました。Zさんが「チョウエキ」と口を滑らしてしまったのは、私が仲間内で自分の失敗を披露しているのを聞いていて、それが移ってしまったからだそうです。「だから、そういう間違った単語は人様の耳に入れないように」という二重の叱責でした。

別の業務では Leitplanke ができました。「こういうベーシックな単語は辞書を牽くことなく、すぐに訳せる」との慢心から、そのまま訳しました。ところが隣に座っていたZさんがメモ帳に大きく「ガード」と書いて寄こすのです。「でも、ガードは Leitplanke ではないわよね～」と思いながら、Leitplanke が登場するたびに、自分の選んだドイツ語単語を繰り返しました。休憩のときZさんが「関川さん、Leitplanke をなんと訳したか覚えてる？」と聞くので、「Leitplanke の日本語はガードではなくて、ガードルでしょう」と胸を張って応えたら、思いっきり呆れ返られました。「Leitplanke はガードレール、ガードルは女性の下着」男性聴衆の集まる会議で女性下着の名称を連呼していたとは、赤面物です。

赤面といえば、同僚通訳者(女性)が「〇〇氏(男性)は無能である」というべきところを「〇〇氏は不能である」といつておられたのも楽しい思い出です。

「無能」と「不能」は思い違いなのか、言い違いなのか迷う例ですが、言い違いならば誰でも経験があるのではないのでしょうか。Zさんでさえ「スターフルーツ」のことを「スターウォーズ」といい、ブースのなかで笑い転がっていたことがありました。

でも、笑える例だったら良いのですが、笑えない例もあります。思い違いの例をもうひとつご紹介します。

1. Association Internationale des Interprètes de Conférence: [www.aiic.net](http://www.aiic.net)

駆け出しの頃、国防省の通訳にいったときのことで。長いテーブルの片側にドイツの軍人、反対側に日本の自衛官が座っておられ、「さて、自己紹介」ということになりました。知らない人ばかりがずらっと並び、名簿もないなかでの自己紹介。耳から聞いた単語を必死で通訳してゆきます。そこで、一人の軍人が「Ich bin zuständig für die Aufklärung.」といわれました。独文出身の私にとって **Aufklärung** とは啓蒙主義。「軍の内部か、市民を対象とする教育担当者なのかな」と思いつつ「啓蒙担当です」と訳しました。長くて難しい会議終了後、自衛官の方々がポツダムのサンスシー宮殿の見学に同行し、ドイツ人ガイドの説明を訳すことになりました。「Friedrich der Große war ein großer Aufklärer.」「フリードリヒ大王は偉大な啓蒙専制君主でした」しばらくたってドイツ駐在武官がやってきて、「Aufklärung が啓蒙ということ初めて習いました」といわれるのです。ドイツ語に堪能な武官がいまさらなにを…と思った瞬間に、ハッとしました。武官はとでも遠回しに、フリードリヒ大王の **Aufklärung** と軍隊の **Aufklärung** が別物であることを私に教えてくださっていたのです。これこそ本当の赤面物でした。

## 単語を思い出せない例

私の苦手とする単語に **Gefängnis** があります。初めて通訳したときは「牢屋」と訳しました。即座に同僚達が「牢屋というのは水戸黄門とか大岡越前にでてくるもので、今は刑務所」と教えてくれました。ところが数ヶ月か数年経ってからまた **Gefängnis** がでてきたとき、「牢屋ではいけない」ということは覚えていても、それではなんというのか思い出せません。苦し紛れに口にしたのが「監獄」。ふたたび同僚達によるケリが入りました。

私はとにかく刑務所関係が苦手です。刑務所や法律に関する業務ではなく、まったく無関係のコンテキストで急に **Gefängnis** がでてくると、どうしてもオタオタしてしまいます。セラピー関係の会議で、出所を間近に控えた少年のメンタルケアをしている人の話しになったときは「出所」という単語が出てきませんでした。あいにくと一緒にブースに入ったのは、私が刑務所関係に弱いことを知らない同僚で、私が何故詰まっているのが分からず——普通、「出所」では話まりませんから——メモを書いてくださいませでした。そこで思いついたのが「娑婆にでる」。私が口にした瞬間に、同僚は慌てて「出所」と書いてくれました。業務終了後、落ち込んだままの状態に戻った私はZさんに『出所』という単語が出てこなくて『娑婆に出る』とってしまった」と電話したところ、思いつき笑われました。ところが、Bさんにも話したところ、『娑婆』は仏教用語で、良い言葉なのよ」と言われ、嬉しくなり、改めてZさんに電話し、『娑婆』って良い言葉なんだってね」と喜んで報告したら、また窘められました。Zさんいわく、「コンテキストを考えなさい」

別の同僚も、刑務所関係は強くなさそうです。ドイツの公的年金の受給開始年齢がテーマになったとき、「ジェット機のパイロットと **Justizvollzugsbeamte** の支給開始年齢が一番低い」という話しになり、「司法関係の人」と訳していました。司法関係の人が皆45歳でリタイアしてしまったら、後継者不足で大変でしょうね。

単語を思い出せない例は結構多く、「唾液」がでてこなくて「よだれ」といい、後で「せめて『つば』にしておけば良かった」と後悔したり、**Konkurs** がでてこないで **Pleite gehen** としたり、本当にキリがありません。でも、通訳の現場では単語を思いつかないまま硬直してしまうよりは、少々品が落ちてでも、ニュアンスが異なっても、何か言ったほうが言わないよりは良いのです。学生時代にアルバイトで通訳していた頃、**drei Millionen** という単語を知らず、**drei mit sechs Nullen** で済ましていた私ですが、それでもパニックに陥って黙ってしまうよりは良かったのです。

もちろん、プロの通訳者ならば上述のような事態が生じないように常日頃最大の研鑽をつづけなければならないことはあえて記すこともないでしょう。

## 訳が良くなかった例

定訳が決まっていない場合に、色々試行錯誤するのも通訳者の性です。たとえば **Praxisgebühren** など、未だに色々考えてしまいます。

何年も前の話ですが、日本の勤労青年の一行がドレスデンを訪れたときのことで。一行のなかには自動車メーカーに勤務している人や車の整備士もいて、「その関係の施設を見学したい」と希望が述べられました。主催者側が準備した訪問先にはオープニングしたばかりのフォルクスワーゲン社の「ガラスの工場(Gläserne Manufaktur)」もありましたが、どうしても他の施設を見たいと強く希望され、初日に急遽新たな訪問先を手配しました。ところが二日

目に「ガラスの工場」を訪れたときの反応が、「ガラスの工場って、コップとかグラスを作っている工場かと思っていたら、自動車工場なんだ～」というもので、ものすごく拍子抜けしました。その後、私は「ガラス張りの工場」と訳すようにし、最近では「シースルー工場」と訳しています。

## 片仮名(外来語)関連の失敗例

「シースルー工場」でも分かるように、私自身は結構片仮名に逃げる傾向があります。経験を積みれば積むほど、片仮名のメリットというか効用に気づかされます。

記憶している一番古い例は、駆け出しの頃の **Konverter** です。独文和訳のレクチャーを通して「転換炉」と訳していたのですが、レクチャーが終わって質疑応答になったときに、日本の方が「さきほどの回転炉ですがね、何をやるものですか」と聞かれたのです。私が「転換炉を回転させ、その際に炉のなかに××を加え、そこで〇〇が△△に転換され」などと訳しているうちに、聞いている方の頭のなかには「転換→回転」しかのこらず、「〇〇を△△にする」という主要メッセージが抜けてしまったのでしょう。こういう場合、「コンバータ」とでも言うておけば、聞いておられる日本の方は「コンバータ?! なんだか分からないぞ。しっかり聞いておこう」と感じてくださったかもしれないと臍を噛みました。

ですから、最近では、片仮名を使わないで失敗することはあまりありません。

しかし、日本語の達者な外国の方は——通訳者もそうでない人も——片仮名を避ける傾向がみられます。これは、とても残念なことです。

ドイツ人スピーカーが日本語で講演されたことがありますが、そのなかで、たとえば「背景音楽」とおっしゃるので、「う〜ん、気持ちは分からないでもないけれど、ここは『バックグラウンド・ミュージック』で良いのに」と思いました。

また、オフィス機器メーカーの会議を通訳した際に一緒になったドイツ人通訳者は、終始一貫して「印刷機」「複写機」「黒白と色つき」「100分の3の成長」で通していました。ここは「プリンター」「コピー機」「モノクロとカラー」「成長率3パーセント」にしたほうが分かりやすいと思うのですが…。

もともと、私も外国暮らしが長くなると、日本で流行中の片仮名言葉、とりわけ省略形をはじめとする一過性の流行語が分からなくて困ることがあります。また、もともと英語の単語でも、それが日本語として根付いていることを知らないで困るのが外来語です。

これも何年前の話ですが、理容師の世界大会の通訳に借り出されたことがありました。会場で、「打合せをしたいから」と日本の理容師に呼び出されました。「僕は、エクステンションでやったときの話しをするから」聞いていた私は「?」「エクステンションでやる」というのですから、「どこかの建物のアネックスで開催したショーの話しをされるのかな」と思ったのですけれども、「もしかして、とっても評判だったショーだったり、日本人なら誰でも知っている建物だったりしたら困る」と思い、確認のために「エクステンションって、なんでしょうかと訪ねました。そうしたら、理容師さんはムンズと私のロングヘアを掴んで一言。「これだよ」私、自毛なんですけれども…。

## ヒアリングがダメだった例

上述のドレーズデンの勤労青年の一行の例をもうひとつ挙げます。

一日中通訳しているのは大変だろうと気を利かしてくれた地元受け入れ機関の方(ドイツ人)が、移動の車中で日本の青年達に英語で話しかけました。ただ、往々にしてあることなのですが、ものすごいドイツ訛りの英語で、日本の勤労青年達もそれほど英語が得意でない、という状況です。ドイツ人が右腕で左から右に大きく弧を描いて楽しそうに「×××」と叫びました。青年達は聞き取れず、助けを求めると私の顔をみます。しかし、私も聞き取れません。なんだか「ワルシャワ」といったように聞こえたのですけれども、右腕の先には道路標識があり、そこには「Pまで〇〇キロメートル」と書いてあります。仕方ないので、「P方面に進むと、ワルシャワに着くそうです」と訳しました。どうしてこのシチュエーションでワルシャワがでてくるのか、自分でも全く分かりません。そこから車は大きくユーターンし、しばらくするとまたもや前方を示す大きな身振りで「×××」ここをまっすぐに行くとワルシャワのはずはない、と考えた私の脳み

そはフル回転。そのとき急に閃きました。「rush hour」そう、ドレーズデンの方は渋滞中の道路を満面の笑顔で指し示しながら、「ラッシュアワー」と叫んでおられたのです。

ヒアリングで失敗するのは外国語の場合だけではなく、日本語の場合も同じです。

19世紀のドイツ社会学・哲学関連の会議で基調報告がすべて終わり、討議になったときです。日本の先生が雑談風に話しはじめました。「私は最近マキアベリの著作も読んでいるのですが…」それを訳しつつ、頭のなかでは「そうか、19世紀のドイツ社会学と、16世紀のイタリアの政治思想はつながっているのね」と考えていました。しばらくすると先生は「最近新たに関心を持っているのが、フーケです」と言われました。「そうか、マキアベリから17世紀のフランスの財務卿に関心が広がったのね」と私は一人納得し、Nicolas Fouquet と訳出しました。ところが、フーケの話がつづくのですが、私の頭のなかで少しずつ話しが噛み合わなくなってゆきました。そして、ついに「朝目覚めたときのフーケと、夕方のフーケが…」という文章でようやく気づきました。先生は「Fouquet」ではなく、「風景」について話しておられたのです。

上の二つの例は、「予想のつかない場合にヒアリングがダメになる」例ですが、こういう失敗は、ほかの通訳者も経験されていることと思います。

ヒアリングについて思うのは、「人は、自分の知っている単語しか聞き取れない」ということです。

通訳の話しではありませんが、ある事務所のドイツ人庶務が、日本人職員に対して「Wir müssen miteinander reden.」と言った現場に出会ったことがありました。そのとき、日本人職員が豆鉄砲をくらったような顔をして「Tomaten?」と応えたのです。これが、「人は、自分の知っている単語しか聞き取れない」ということに気づいた最初の出来事でした。

私自身の例では、CNNのラジオニュースを聞いていたときに、Japan と聞こえたので耳を澄ませたのですが、話しの内容から絶対に日本のはずはないニュースだったのです。でも、最後まで ~pan としか聞き取れず、何処の国の話しか分かりませんでした。

## 発音の弱点

日本の学校で漢字試験があるように、ドイツの学校でも書き取り試験があり、しっかりとスペルを叩き込まれます。しかし、高校を卒業して十一年経つとそういうこともなく、スペルを忘れ、そのうちに母音の後に「R」が入るのか入らないのか分からなくなることがあります。たとえば Agentur なのか Argentur なのか分からなくなるのです。こういうとき、ドイツの友人は「富士子はハンブルク育ちだから母音がにごるのも仕方ない」と慰めてくれますが、「O」のあとに「R」を入れたがために Exotismus と言うつもりが Exorzismus と口を滑らしてしまったり、「E」のあとに「R」を発音した結果 Emirate を Eremiten と言ってしまふのはプロの通訳者にとって大失態です。また、これもハンブルクの影響なのですが、Flugzeug のように zeug で終わる言葉の場合、どうしても「ツォイク」ではなくて「ツォイヒ」と発音してしまいます。直そうとは思いますが、急いでいるときは「ハンブルク訛りなので許して」と飛ばしてしまいます。

あるとき、nationalsozialistisch というべきところを narzisstisch と言ってしまった同僚がいましたが、「A」の後に「R」が入ってしまって口が滑ったのではないかと親近感を感じました。この同僚の名誉のために付言しますと、自分の間違いに自分で気づいて訂正していました。

最後に、発音の弱点とは少し趣が異なりますが、音につられて口が勝手に動いてしまったとしか形容しようのない失敗例です。

あるシンポジウムで、ドイツ人スピーカーが「Ich will ja nicht Eulen nach Athen tragen.」といわれました。「釈迦に説法」にあたる有名な諺、アテネの守護神である女神アテナや、その従者であり、知恵を象徴する鼻の絵が走馬灯のように脳内を駆け巡った私が口にしたのが「アテネにオームを送るようなまねはしたくない」そう、Eule の「オイ」につられて「オーム」と口走ってしまったのです。しかも、会議後、親切な聴衆に指摘されるまで気づかずに一人悦に入っていた愚かな私でした。